りませんが、全てが相殺されてゼ

し得た、とはもちろん考えてはお

口になるわけでは無いことも確信

の状況等から申し上げたいと思う

九七八年 (昭和五十三年)秋

全隊員が一丸となって冬の岩壁

田中成幸現岳連理事長を隊長とし

員を失ったことで完壁な成功を成

の隊員達も救われないと考えます てC3に控えていた隊員、その他

アンナプルナ登山の報告にあた

先ず本登山のいきさつや当時

このことについて、私共は二隊

成功という、先駆的な一ページを

受け取めなくてはなりませんが、

粛な事実として、残された私達が

小林、斉藤君を失ったことは厳

の八〇〇〇メートル峰の岩壁登山

ことは間違いの無い事実でありま 彼等自身が自らの手で切り拓いた

た」と私自身が言わなくては、彼 とにかく「困難に打ち勝って登っ

等も、また第二次アタック隊とし

界のヒマラヤ登山史の中で、冬期

しかし、今回の南壁登山は、

た御家族の方々にも誠に申し訳な

命がけで困難なヒマラヤの山々を

登り続けている、ということでも

色々なものをすてて、文字通り生

だからこそ私達は生活を賭け、

です。二君にはもちろん、残され 藤安平君の下山中の転落死亡事故 は登頂に成功した小林俊之君と斉

ろでも数多く見聞きしております。 登山史の中でも、また身近なとこ 名が登頂に成功することが出来ま アンナプルナを南壁ルートより四 年十二月二十日、午後三時十七分、 御協力を頂きまして、昨一九八七

した。厚く御礼を申し上げます。

うな事故も起り得ることは過去の

いう事実、また小林、斉藤君のよ いう、極限の世界で勝ち取ったと

「バリエーション・ルート」とし

次もやはり「八〇〇〇に峰」の

ただ何とも口惜しく、残念なの

昭和63年 4 月15日

編集野印

群馬県

第35号

刷

県内外のたくさんの方々の御支援、 私共は岳連の皆さんをはじめ、 冬季アンナプルナI峰

八木原

明

登山隊

「に向かい、闘いとったものであ」て、ダウラギリ1峰(八一六七m)

り、山田、三枝の二隊員は無事生 冬の八〇〇〇メートルの岩壁と 南東稜の初登攀に成功した私共は、繁、阿久沢芳雄、金井敏夫、佐藤 海外登山研究会を中心にして「次」

還しております。

の選定に入っていた。 国体後と定め、目標の山とルート ルート隊に岳連会員九名が参加し る、ダウラギリI峰北壁・ペアー 時期は一九八三年に開かれる群馬 九八二年秋のカモシカ同人によ ルートの初登攀に成功した帰りの そのためのメンバー養成も考え、けられ続けていた北壁・ペアー キャラバンの初日に始まった。 の五座登頂を果たした。 は、二十七日間で、過去九隊が退 冬のアンナプルナ南壁登山計画

え、この三つの大条件を前提に計 画を練り直し、推進することにし

アンナプルナにした理由は、

ル以下にはあまり無く、八〇〇〇 メートルを越えた山にしか、本当 冬の厳しさは、八〇〇〇メート 当時考えられた群馬のメンバーで 三者はあまりに困難が予想され、

私達が参加してやはりⅣ峰とⅠ峰 に登っており、「またダウラギリ でⅣ峰とⅠ峰、カモシカ同人でも ダウラギリへは過去、群馬岳連

後に私達と多くの登山を続け 冬のシーズンをオープンすると発 ネパール政府は一九八○年から 大きく動いており、私共のペアー らも証明されている。 ちに、容易に到達していることか あるが、殆んどの隊が七〇〇〇メ の冬の厳しさは無いからである。 - トル台までは比較的短時日のう 冬への潮流はすでにこのように

と、十八名中、十名ということに「かも政府を押し切ったような形で、日本隊だけで三隊の計画があった 九七五年のⅣ峰、一九七九年の このダウラギリI峰北壁登山は Ⅲ、✔峰の縦走登山成功によ 月三十一日にBC建設)から一九 しまった。 八〇年にかけての冬にエベレスト へ行き、二月十七日に成し遂げて ポーランド隊が一九七九年(十二 ポーランドはこれまでに、一九

るようになった斉藤安平を入れる《表したが、その中で早くも、あた

ルート登山のすぐ後に来る冬にも

ラギリI峰のノーマルルートであ る北東稜へは北海道大学そしてエ ヒマラヤ協会がマナスルへ、ダウ るイエティ同人隊が日本人による ベレストへは加藤保男を隊長とす 一つは山田昇を隊長とする日本

、次に1峰(主峰)を登ること 七三年にヒンドウ・クシュのノシ

目論見の大きなステップとして計 ラギリ山群の全山登頂」という大 により「カモシカ同人によるダウ ャック、七四年のローツェとすで

に入ろうとしていた。

冬期初登頂をねらって、先陣争い

宮崎勉、松永幸雄、山田昇、鈴木 画されたものであった。 参加した岳連会員は、石川忍、 にヒマラヤ冬期登山の実績があっ 翌年冬には植村直己を隊長とす

光由、八木原それと斉藤安平を入 登頂し、小松はⅠ峰からⅤ峰まで れると合計十名であった。 そして山田、斉藤、小松幸三が 気、烈風などにより退けられて などが試みられたが、いずれも寒 隊長のエベレスト西稜隊、坂下直 るエベレスト隊、アラン・ラウス 枝の単独によるアンナプルナ北面

っている宮崎は、やろうとしてい

に副隊長として参加することにな

カモシカ同人によるエベレスト隊

そして一九八三年~八四年冬の

とりやめ、鈴木繁とともに加藤隊

へ現地参加することになった。

話を戻して、ペアールートから

たクンブでのエベレストの観察を

ラヤ登山の潮流が、より自然条件 あろう、と考えた私共は「八〇〇 の過酷な「冬期」に大きく向うで これらにより、これからのヒマ 南西壁、ローツェ南壁、マカルー のキャラバンの初日、エベレスト

ト」からの登頂、に『冬期』を加 〇に峰」の「バリエーションルー ズでの登山隊解散後に阿久沢、金 井、佐藤を偵察に向かわせること ルナI峰南壁にしぼり、カトマン の中から、ターゲットをアンナプ 北西壁、ダウラギリ南壁等の候補

それはその後の登山を含めてで はあまりに荷が重すぎる、と思わ

あった。 か」という感じが強く、この山群 から離れたかった、ということも そして私自身が隊長となるので

あれば、なおのこと成功率の一番

などとからみ、多少の論議がされ

安平が撮影隊員として参加。北側

北側には三枝照雄が隊員、

斉藤

の保険や賃金、装備の支給の問題

たことがあった。

規則がある訳ではないので、

来なかったが、南側の山田が冬の

のいわゆるチョモランマは登頂出

足であり、その他に数度に及ぶ大

の、つまり隊員の力不足、気力不

ったが、約八〇〇〇日のサウスコ ルまでは睡眠中の酸素使用のみで

> 成功への一要因となった。 である、と断じた。実際にそれは

> > 倍の数量を用意した。

林には登頂のチャンスを与えなか

の最大の理由としては人為的なも

降雪、シェルパに関する不運な事

故も災いしたが、その人選の失敗

たのであった。

二度到達し、立派に任務を果たし

プをアタックキャンプとする予定

前回は七七〇〇片の第六キャン

う繰り返して言い続けて来た。「我

前回も今回も、私は隊員達にこ

クレバスに転落して足首を骨折し、

そしてその年の冬期登山は、山

はないか、というものであった。 ポーターやシェルバを雇えるので キャンプに、そういった名目での えば、荷上げ量の一番多い下部の 分達で「ここがBCである」と言

ヨンデンが一緒に登頂した。

には尾崎隆、村上和也、ナワン・ エベレストに登頂を果たした。他

などであった。

しかし、それも常識論の中で認め

って良いであろう。

の評価が日本国内で定着したと言

と強く感じた私共は近い将来、必

ず雪辱を果たそう、と決意を新た

ベレスト登山については群馬岳連 に不安があったからであった。(エ

瑖「嶺呂」二十九号、三○号参照

キャンプを二つ減らすことになっ ャンプ地点としていたのである。

がら、春に登っている。それらを らない程の降雪量に苦しめられな 知れぬが、彼等は冬とは比較にな る。しかも寒気は多少ゆるいかも

考え合わせれば、我々に登れない

のボニントン隊は、そこを第二キ

初登攀を成し遂げた一九七〇年

宮崎は前回のアンナブルナ登山

決して登れないルートではない、

失敗したとは言え、技術的には

くら酸素を吸ったとは言え、自分

とするものである。

つ減らし、同地点を第五キャンプ であったが、さらにキャンプを一

マラヤにおける経験と実績は、

等とは比較にならない位、上であ

率いたイギリス隊と較べれば、 々は一九七〇年当時のボニントン

若く、まだ経験の浅い彼が、

人の力で登り、確実に帰ること

この登山で戦略家としての宮崎

自身の活動が不能になってしまっ

人によるエベレストの南北同時登

いういきさつもあったのである。 られることなく、消えて行ったと

一九八三年十二月、カモシカ同

ブルナの南壁へ挑んだのであった。

たのが「植村直己物語」のエベレ

の反省の上に立ち、迅速かつ悪天

十二月前半というのは、十一月

はずがない」と。

事実、ヒマラヤ登山隆盛への緒

二月に帰国した私に持ち込まれ

スト撮影隊長の話であった。

九八四~八五年に私共がアンナ これらの冬の経験を踏まえて、

挙句にアタックに出た隊員のう

山田が登攀隊長、鈴木が隊員とし

告書 ANNAPURNA 等参照

その時の反省点としては、

とが最も必要であると考えていた

ヒマラヤ登山をより経験させるこ

築をした。

ためのタクティクスを再考、再構 候にもつかまらずに、安全に登る

最も天候の安定する時期であり、 からこの頃までが一年のうちで、

ヒマラヤ登山を成功させるには

山田らとともに、次のアンナブル

ア南壁 へ続く 群馬岳連会員中心の

というのは、全隊員が全て足並の ナブルナの南壁を十五日間で登る 私は、撮影隊長を引き受け、宮崎

とする短期速攻である。冬のアン

眼目は登山期間を十五日間前後

い、とする私共の印象はぬぐい去 厳密に考えれば、冬期登山ではな

ボニントン隊長のヌプツェ、アン

ナプルナⅡ峰、ドン・ウイランス

ス隊のヒマラヤ経験はと言えば についたばかりの、当時のイギリ

しかし、現段階としては、一月、

のマッシャブルム他の三回他、延

べ十回に満たないものであった。

エベレスト撮影隊を組織した。

宮崎副隊長、山田登攀隊長の鉄

一十五号、山と溪谷五八八号 (群馬岳連報「嶺呂」二十三号、

頂計画には、南側に宮崎が副隊長

て参加した。

成功となった。

断念しての下山中に転落死し、不 ち一名が、強風などにより登頂を

功したものの、小林と合流しての

単独登頂し、三シーズン登頂に成

小林利明とアタックに出た加藤が

宮崎の参加した加藤保男隊では

ビヴァーク中にともども行方不明

になってしまった。

北海道大学隊のみが完全に登頂

成功には少し釈然としないところ 成功という結果であったが、この

コルに作っての登頂ということで 五九四〇にという高所である北東

前にもネバール人を雇用する場合

このBCの位置については、以

まで行き、下降してしまった。 くも登頂を逸した斉藤は南峰直下

当時十九才の群大生であった小

が、宮崎はそれを押し切り、可能 はないか、という意見も出された C3間の標高差があり過ぎるので

> 用不能になり、ルート工作のやり ロープや登攀具が雪に埋没し、使 雪にやられる、ということである。

直しを迫られる可能性があるため、

る。この後の記録は三十六号へ。

ロープなどがルートは教えてくれ

の記録を参考に出来、岩場に残る 的な困難性に変りはないが、彼等

り、やはり酸素器具の故障で惜し

そのうちの五名が岳連会員であ

キャンプ建設であった。

前回の経験者達からは、C2~

たものの、七名がエベレストの登 ため、頂上での撮影は出来なかっ 素器具の不調で途中から下山した

おかつたとえ降雪があっても、安 近づけ、キャンプ数を減らし、な

全に長期戦に耐えられる地点への

用意した。

長びくということの理由は、降

る訳ではない。その意味では技術

初登隊のロープやハーケンが使え

十七年という年月が過ぎた今

慮に入れ、二月中旬までの食糧を 場合、二月までズレ込むことも考 の結果を得ることが出来た。 という構成となり、私の思惑通り を含む十一名中、八名が岳連会員

カメラを持たせたシェルパが酸

応計画を立てた。

もう一つはBCをもっと南壁に

し、十五日間で完登出来なかった

回のアンナブルナを入れれば

六十回を数える。 星野総隊長の前

十一回ということになる。

それでも慎重の上にも慎重を期

原とカメラマン助手の斉藤安平を 照雄、佐藤光由、小林俊之、八木 壁の布陣、隊員が名塚秀二、三枝

入れての撮影登山隊はカメラマン

前提とすべきである。我々の経験

のことを考えれば、先ずこれを大

しかし、一番の問題である天侯

計画であったと言えるであろう。 者では無いだけに、やはり大胆な そろった豊富なヒマラヤ登山経験

> ンステップである、という考え方 ぎるため、次の厳冬期登山へのワ 二月の冬の真最中の登山は困難す

山の鉄の時代という、新しい時代

もちろんあの時代にヒマラヤ登

とする宮崎は、それを達成するた と実績をもってすれば可能である

準備することもない。 それらを十

の上に立てば、無駄な装備などを

プルナ南壁」を読み、前回の経験

クリス・ボニントン著「アンナ

山家である。アルプス他の困難な

を開く登山隊に参加するような登

登攀の経験はもっていた。

二分に検討した上での宮崎の戦略

名の経験は、マッキンリーなどは

除く、ヒマラヤ地域だけで延べ

総隊長と藤岡ドクターを除く十二

私達の側は、今日の場合、星野

の方策として、充分なる高所順

であった。

ト・キャンプ」と称し、その上の 登山隊のベースキャンプを「レス

というのは、秋のうちに通常の

ャンプを六〇〇〇メートル近い、 アイスフォールを越え、ベースキ 自身が、登山活動初日にヒドン・ 田のマナスルでは隊長である山田 雪もそれ程は降るまい、と考えた。 成している山」が良いであろう。 の風の影響を受けない「内院を形 登るためには、ジェットストーム

高いアンナプルナの南壁とし、そ

トンルートとしたかったのである。 の中で最も可能性の高い、ボニン

冬に長いルートを時間をかけて

議の場所や、謂をコース順に説明

し、皆さんの登山に参考となれば

ていただきたくこの赤城の七不思

般の人達や中高年の人達に登る

群馬中高年山岳会はこの秘境を

だと思います。

る赤城山の秘境と言ってもよい所 えても赤城の七不思議は知られざ

① 銚子のガラン 幸いです。

んだ一つの大火口瀬であります。

粕川の激流はこの大火口瀬の大

地を訪れて、このミズナラの自然 アスファルト鋪装の林道が走って

います。この鋪装道路を左に約一

○○○米ばかり歩くと、小さな川

小沼を水源とする粕川の溪流が刻

ます。

明治の晩年、東京の文人がこの

血の池の北側に赤城温泉に降る

赤城山外輪山内壁にある火口湖、

ナラの大木の美事な自然林があり

とです。

22

て大岩の下部より又、流れ出て来 岩の胎内に消えてゆきます。そし 岩にぶつかり、その激流の姿が大

森も、かくやあらんと、このミズ

童話の七人の小人にあるオトギの 林の神秘的な雰囲気に心を打たれ、

ナラの森をオトギの森と名付けた

の小さな川が三途の川です。 があり、橋が架けてあります。こ

が出来ますが、衣服の濡れること この大岩の胎内はくぐり抜ける事 ます。実に不思議な光景です。

③ 血の池 といわれています。

オトギの森より広い道を北に歩

流れたり、消えたり、昔の人が考

180 銭子のガラン 50 オトギの葯

な川が流れていました。 この川は

昔は橋もなく、只林の中を小さ

赤城山の秘境 赤城の七不思議

あります。木の葉の散る晩秋の頃 は覚悟しなければなりません。又 の氷壁にいどむ若人の姿も見られ はよく見られます。冬期は三○米 この附近はカモシカの生息地でも

昔から赤城山には、赤城の七不 粕川の溪流に沿って銚子のガラ オトギの森

合せても赤城の七不思議と言う事 協会に赤城の七不思議の事を問 思議と言われている所が七ケ所あ ずねる人もなく、又、地元の観光 りますが、現在はこの七ケ所をた あるのか名称がなんと言うのか判 は聞いていますが、それが何処に を遡行すると、静かな台地にミズ ンの頂点より五○○米ばかり粕川

りませんと言う言葉が返ってくる

だけです。

がいないことです。このことを考

赤城の七不思議を知っている人

血の池と称して怖れていたとのこ か赤色に染まっていたので人々は あげてみると鉄分を含んでいるの

湛えていて其の池の水を手にくみ

ります。今は水が涸れて昔の面影

れる水の多い時は川になり、少な た。この三途の川は天候により流

はありませんが、昔は満々と水を

二〇〇〇㎡ばかりの広さの池があ この領を北面に降りると、そこに き、小沼の西側より朝香嶺に登り、

> 川と称して気味悪く思っていまし えれば不思議な川でした。三途の

⑤ ガキボッタ しておりました。 い時は伏流となって下方に姿を表

り行き、軽井沢峠の手前に案内板

積み上げて塔を作り、旅の無事を

りながら念仏をとなえては小石を 大洞へ行く人達はみんなここを通

不思議の概要です

オトギの森と標識がある。オトギ 注意。谷を台地まで登り三分位で

祈りました。人々は淋しげなこの

三途の川より西に一〇〇米ばか

すと一○○米ばかりで湿原に出ま がありますからそこを右に曲りま

す。この湿原は、原の全部が湿原 なく賽の河原が何処であったかも 様になりました。現在は通る道も 小石ばかりの原を賽の河原と呼ぶ

い、ボツタとは田んぼのことで ガキとは方言で子供とか、小さ 上げていて、山は崩れて谷となり、 の西側で昔は盛んに水蒸気を吹き 巨岩は重なり合い、山肌は茶色と 賽の河原の北方にあり、地蔵岳

> の林道を赤城温泉より一キロ登る く舗装された林道があります。こ

と右側に銚子のガラン入口があり

原に通じる道も今は消えてありま ボッタです。ガキボッタより賽の河 案内 板の手前を右に入ればガキ さな田んぼの集りの様な不思議な でなく、恰も人工を加えられた小

定かではありません。

とは如何にも不思議なことと思い 城山の山頂に田んぼの集落がある き上げているのか不思議でした。 城山が何故この谷だけ水蒸気を吹

田んぽの集 りと言うことです。赤

つまり、ガキボッタとは小さな

なり、あたかも地獄の谷の如き形

相でした。死火山であるはずの赤

ガキボッタより二〇〇米ばかり 賽の河原

東で地蔵岳の麓に茂る、木もなく

寒々とした小石ばかりの原があり

ました。昔はこの原に道があり、

原より地獄谷へ行く道も消えて今 淋しい谷となっています。賽の河 現在はその水蒸気の煙りもなく

はありません。只赤城山有料道路 より細い道が地獄谷へ行く名残り を止めています。以上が赤城の七 り、左に巻いて登り、又一時間の 一砂防堤の四米位の滝に出る、直

間ばかりで高さ一○米位の滝があ 登し、又粕川を遡行すること一時

抜け、一〇分も谷間を歩かないで 銚子のガランはぬれながらくぐり

遡行で銚子のガランに着きます。

あり、この急坂を三○分登ると銚 引き返し、左側の山肌に登る道が 間より抜け出す細い道が上の台地 オトギの森下方の谷間に着き、 子のガランの頂部に出ます。ここ 直登は無理ですので最後の滝まで 最後の岩壁です。三○米位あり に向っていますから見失わない様 から又粕川を遡行し川を渡って東 に行くとツツジケ峰より長七郎山 ン頂部より遡行すること四○分で に行きますから注意。 銚子のガラ

事故や台風による粕川の水害、等 を遡行しましたが、クサリの墜落 はんして大滝の頂部にあがり粕川 壁に取り付けてあったクサリで登 ○赤城の七不思議登山コース 止され、現在は南面より大洞に行 でクサリは外されこのコースは廃 昔は粕川の滝沢不動の大滝の岩 米位歩きますと軽井沢峰があり に三途の川の標識があり、 り林道を二○○○米位歩けば右側 を下りれば血の池です。血の池よ 山道もはっきりしている。朝香嶺 す。ここより小沼までは迷う事な の森で一休みしたら次は血の池で 、小沼西側より登る朝香嶺の登

ます。赤城温泉の御主人に案内し た道があり、このコースを一〇分 入口を一○米位入るとはっきりし て戴く様おすすめ致します。この 位粕川に向って降りると不動の大 行って下さい。 方は赤城山の有料道路よりの道を 定かでありません。 地獄谷に行く せん。又賽の河原の存在位置すら 今後この赤城の七不思議を観光

います。以上で不備ながら、 の再現が出来れば素晴らしいと思 協会等の協力で登山道を作り、 の七不思議の紹介を終ります

左右を遡行すること一時間で、第

滝の上に出ます。 ここから粕川を

群馬中高年山岳会顧問

昭和63年4月15日	嶺 呂	第 35 号 (4)
山男は誰でもこんな気持ちではないだろうか。然し中高年者の山ないだろうか。然し中高年者の山ないだろうか。然し中高年者の山待うおそれがある。中高年者の山任うおそれがある。中高年者の進岳会がほしいとは、中高年者の誰もが思っていることと思う。 偶々昭和五十八年一月七日付、上毛新聞の読者役書欄「ひろば」によせられた高崎市在住の当時五によせられた高崎市在住の当時五によせられた高崎市在住の当時五によせられた高崎市在住の当時五	○群馬中高年山岳会の結成由来 若壮年者と一緒に岩登りや、沢 若壮年者と一緒に岩登りや、沢 を別れる運命にある。そんな時マ と別れる運命にある。そんな時マ と別れる運命にある。そんな時マ と別れる運命にある。そんな時マ と別れる運命にある。と山の世界 から消え去ることが出来るだろうか。 山男は七十才になっても、八十 才になっても、九十才になっても 山を忘れることの出来ない宿命にある。 私も十三才より山登りを始めて、 登山歴六十五年、現在七十八才で ある。 私も十三才よりは出来 ないが、高山や岩山なら登れるし、	我ら発馬工事に
こで、山岳会と名の付くところにはかたっぱし電話を掛けて見たけはかたっぱし電話を掛けて見たけはかたっぱし電話を掛けて見たけいるにはいますがね、とやんわりいるにはいますがね、とやんわりいるにはいますがね、とやんわりいるにはいますがね、とやんわりいるにはいますがね、とやんわりいるにはいますがね、とやんわりいるにはいますがね、とやんわりいるにはいますがね、とやんわりいる人が居ると聞き、訪ねと言った具合である。又長年山をと言った具合である。又長年山を	馬県に何故中高年山岳会がないのでしょう、誰か中高年山岳会をでしょう、誰か中高年山岳会をでしょう、誰か中高年山岳会をでしょう、誰か中高年山岳会をとれるい。それも前半は数える程度の山歴でしかないのに「中年で覚えた何とやらは死ぬまで止まらない」とだれかが言ったように、にわかに燃え上がった山祭之る程度の山歴でしかないのに「中年で覚えた何とやらは死ぬまで止まらない」とだれかが言ったように、にわかに燃え上がった山祭山ま然といるがとがない。それの地で、私の不満は中高年に出去るないことである。若い人ならともかく、私達の年令になるとなかなか山友は得られない。そ	山口丑太郎
第一回山行として昭和五十八年四月二十四日浅間隠山に登った。 〇群馬中高年山岳会の登山理念 群馬中高年山岳会の登山理念 群馬中高年山岳会の登山理念 群馬中高年山岳会の登山理念 というような、山に対して戦闘意識を持てば、 は山に挑戦したり、山を征服する というような、山に対して戦闘意 ではない。登山に際 し、山に対して戦闘意識を持てば、 世には山より反撃を受け、思わぬ アクシデントの起ることもある。 が展中高年山岳会の理念は、あ	るのに、そして各地に出来でいるのに、何故山国上州に無いのだろのに、何故山国上州に無いのだろのに、何故山国上州に無いのだろう。 中高年だって高山もやれるし、中高年だって高山もやれるし、といた登山をするなら、老いらくだい。ABコースに分けて体力に応じた登山をするなら、老いらくだって十分楽しめる。どなたか中高にの役書が発端となり山のOBはいらいると協議を重ね、紆余曲折はあったが、入会制限年令は五十才以上として、会員十五名にて初代会長に高崎市在住の望月新にの社書で、公司を書が発端となり山のOBにが、入会制限年令ははいたのといませんか?。以上につきいろいると協議を重ね、紆余世折はあったが、入会制限年令は五十才以上として、会員十五名にて、昭和五十八年四月一日を以して、昭和五十八年四月一日を以して、昭和五十八年四月一日を以	はのないこんな素適な登山が出来 当に楽しい山行を堪能した。気兼 当に楽しい山行を堪能した。気兼 となった。
大をおび、山岳会結成以来三ケ年半を経過した現在、会員も全県下に 広がり、次の通り県下に九支部が結成されております。 一館林・太田・大泉地区太田支部 一館林・太田・大泉地区太田支部 二伊勢崎地区 伊勢崎支部 三前橋地区 高崎支部 二宮岡・藤岡地区 富岡支部 一宮田地区 富岡支部 一宮田地区 宮岡支部	地擁して、人と山のコミュニケイションに依り、楽しく安全な登山が出来る。これが群馬中高年山岳会が理想とする登山理念である。 大り返してはならない。三十七才の男性リーダーのもと、那須岳に雲中登山し、五十三才の女性が凍死し、山岳雑誌岳人より、「これでいいのか中高年登山」と批判をでいいのか中高年自告会は昭和五十八年四月一日に結成以来、毎月其の年四月一日に結成以来、毎月其の年四月一日に結成以来、毎月其の年四月一日に結成以来、毎月其の年四月一日に結成以来、毎月其の年四月一日に結成以来、毎月其の年四月一日に結成以来、毎月其の日間報され、多くの人の注目	に登る時は、山も又吾々を暖かくいに助け合い、和気あいあいと八いに助け合い、和気あいあいと八いに助け合い、和気あいあいと八いに助け合い、和気あいあいと八日然に親しみ、脚力に応じて山に自然に親しる、四十才、九十才までも山を愛し山を理解して、くまでも山を愛し山を理解して、くまでも山を愛し山を理解して、
その他合計三十九回の山行。 昭和六十一年度 鳴神山・蓼科山・木曽駒ケ岳ー宝剣岳・南ア鳳凰三山・白毛門山・笠ケ岳・谷川岳ー平標山縦走・その他合計四十五回の山行。 昭和六十二年度 巻機山米子沢・平ケ岳・角落山剣ケ峰・日光白根山・平標山ー 仙ノ倉山・北海道各山トレッキング・黒斑山・其の他合計四十三回の山行。	○群馬中高年山岳会は、山が好き で山を愛するが故に山に登り、会 員相互の健康と親睦を願う人達の 山岳会であるため、登山回数も多 く、昭和五十八年四月一日結成以 来の年度別山行実施回数は左記の 来の年度別山行実施回数は左記の 相五十八年度 昭和五十八年度 昭和五十八年度 昭和五十八年度 昭和五十八年度 昭和五十八年度 昭和五十八年度 昭和五十八年度 昭和五十九年度 昭和五十九年度 昭和五十九年度 昭和五十九年度 昭和五十九年度 昭和五十九年度 昭和五十九年度 昭和五十九年度 昭和五十十百回の山行。 昭和五十年度 田大鳴虫山・養機山・庚申山 ・其の他合計三十回の山行。 昭和六十年度 田次十年度	九勢多地区勢多支部会員数は男性七十名、女性八十名、合計一五○名、会員の最高年令は八十二才の女性で、登山歴三十年、登った山は三○○以上のベテランです。東京の「おいらく山テランです。東京の「おいらく山テランです。東京の「おいらく山テランです。東京の「おいらく山テランです。東京の「おいらく山下の会員でもある。

山岳会は未だ無い。群馬中高年山

岳会が最初に完歩するのが夢であ

きつづけると自負するものである。

三〇〇ある。この山を全部登った

又群馬県には登山可能な山が約

を贈呈いたしました。

石井謙一

一郎副会長

群馬県総合表彰受賞

会に対し、県山岳連盟より感謝状 **倉渕村、はまゆう山荘、倉渕山岳**

が存在する限り、山のロマンは生 なった時でも、群馬中高年山岳会

〇群馬中高年山岳会今後の展望。

山男のOBが八十才、九十才に

事終了しました。

尚開催に特別御協力いただいた

まれ、各コースとも事故もなく無

る。そして究極の山をさがしに。 県民の日制定記念 昭和六十二年十月二十五日(日 第十一回県民登山 大会開催される

る六十二年五月一日群馬県総合表

山岳連盟石井謙一郎副会長が去

倉渕村、浅間隠山、角落山を会場 に群馬県山岳連盟の主催で「県民 長の祝賀会が星野岳連会長を初め 今後の励みになるものです。 心上 りお祝いいたします。又石井副会 私共岳人にとりましても喜ばしく 彰を受賞されました。この受賞は

とする沢山の関係者により六十一

登山し、山の自然に親しむと共に の日」を記念して群馬県内の山を

年六月二十七日(土)厚生年金会館

にて開催され盛大でした。

の保持増進を図る事を趣旨として

群馬県、群馬県教育委員会、(財)

群馬県体育協会、群馬県スポーツ

登山の喜びを味わい、健康と体力

シスカンスカンスカンスカンスカンスカン

嶺呂のいわれ

うれていていていていていていてい

る言葉で、嶺は、山々・峰々の意 味で、呂は親愛・感動の念をこめ

衛呂とは、万葉集の中に出てく

て使う接尾語です。万葉集上毛野

国の歌の中に、「久呂保の嶺呂」

名山)などと使われております。 命名者は浜名会長です。久呂保の (赤城山)・「伊香保の嶺呂」(榛

々の意味で、保は高くそびえてい 香保の嶺呂は、いかつい大きな山 Dコース(白沢・北倉沢・角落男

Bコース(一倉尾根コース)、C

後、Aコース(西南尾根コース)、 前六時より受付、七時から開会式 岳会、の後援により、開催し、午 委員会、倉渕村体育協会、倉渕山 振興事業団、倉渕村、倉渕村教育

コース (白沢・角落男坂コース)、

衛呂は、黒々とした山頂付近の針

葉樹林を遠望しての呼び名で、伊

加者、登山教室受講生を含めて一 六九名の参加で、当日は晴天に恵

ダーの指示の下で、役員、一般参 の各コースに別れ、各コースリー

裟丸・雨ん坊主・中垣岩コース) 坂コース)、Eコースコース(袈

る様子をあらわし、いずれも麓の

人々が、親愛をこめて呼んでいた

ようです。 群馬岳連の会報の名に ふさわしいものと思います。

35 号 記載り行われました。 昭和六十二年十二月十九日(土) に吾妻山岳会会長、川村尚雄氏(五十七才) は、療養中御逝去されました。 告別式は十二月二十日(日) 明日 昭和六十二年十二月二十日(日) 場所 群馬県自治会館 場所 群馬県自治会館 場所 群馬県自治会館 中島、高橋、武井、阿部健中島、高橋、武井、阿部健中島、高橋、武井、阿部健中島、高橋、武井、阿部健中島、高橋、武井、阿部健・中島、高橋、武井、阿部健・中島、高橋、武井、阿部健・中島、高橋、武井、阿部健・中島、高橋、武井、阿部健・中島、高橋、武井、阿部線小此木	田和六十二年十二月十九に執り行われました。告別式は十二月十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七大。告別式は十二月十七、高田、松田、村山、岡安、水野、竹山、岡安、水野、竹山、岡安、水野、竹山、岡安、水野、竹山、岡安、水野、竹山、岡安、水野、竹山、岡安、水野、竹山、岡安、水野、竹山、田、高田、松田、村上、田、高田、松田、村上、田、高橋、武井、、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、高橋、武井、田、田、高橋、武井、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、田、	昭和六十二年十二月十七十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七十一月二十四十十七十一年十十十十二年十十十二年十十十二年十十十二年十十十二年十十十二年十十十	田和六十二年十二月十九に執り行われました。告別式は十二月十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去した。告別式は十二月二十四十七才)は、寮養中御逝去した。告別式は十二月二十四十七才)は、寮養中御逝去した。告別式は十二月二十四十二年十十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七才)は、寮養中御逝去十七十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十	田和六十二年十二月十九に執り行われました。告別式は十二月十七十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七十十二年十二年六月十七十二年十二年六月十七十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十二年十	田和六十二年十二月十七次。告別式は十二月十七次。告別式は十二月十七次。告別式は十二月十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二月二十七次。告別式は十二年六十十二年六十十二年六十十二年六十十二年六十十二年六十十二年六十十二年六	田和六十二年十二月十九に執り行われました。 田和六十二年十二月十九に表妻山岳会会長、川村尚に吾妻山岳会会長、川村尚 中七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七才)は、療養中御逝去十七月二十 田和六十二年六月十 場所、群馬県自治会館 出席 星野、小林、石井、 太田、樋口、大井、 高田、松田、村上、															ました。告別式は十二月十二日出		大腸ガンのため療養中御逝去され	議員、柴田義孝氏(五十四才)は	に群馬ミヤマ山岳会会長・岳連評	昭和六十二年十二月十日(木)	七月三日に執り行われました。	患で御逝去されました。告別式は	年山岳会会長の望月新吉氏が胃疾	昭和六十二年七月一日群馬中高		御逝去される	和 群馬中高年山岳会会長	_	ミヤマ山岳会会長・岳連評議員	月 前橋山岳会会長・岳連常任理
	〇六十一年度と六十二年度の繰越	て行けるのか?。	より減額になっているが、やっ	○支出の部で事務費が六十一年度	〇六十二年度繰入金の予算の件。	○群馬の山決算方法について。	について。	○関東地区岳連協議会の予算計上	通り。	んでいる。主な質問事項は次の	算額は三百十五万二千円を見込	案を承認する。 六十二年度総予	質疑応答の後事業計画及び予算	〇六十二年度事業計画及び予算	○監査報告(堀江)	●決算について承認。		りいたします。	なりません。 心より御冥福をお祈	ならない方々でした。大変残念で	指導いただいた岳連にはなくては	々会員の大先輩として公私共々御	御三人の方々は生前岳連及び我	れました。	別式は一月六日(水)に執り行わ	不全のため御逝去されました。告	大井清氏(六十二才)は、急性心	前橋山岳会会長・岳連常任理事、	昭和六十三年一月一日 (金) に	に執り行われました。			望月新吉氏	川村尚雄氏	柴	事大井清
生いをなした月 。 /くず	六月七日(日)に少年種別の予	三さんが主任審判員となる。	松田常任理事、高体連の白石侑	間、茨城県で関東地区大会開催、	○国体部 七月二十四日から三日	ロニクルが中心。(羽野)	統計、田中理事長の岳連遭難ク	発行予定。女屋事務局長の国体	○編集部 今月に嶺呂三十三号を	部会報告	に開催	○県民登山大会を十月二十五日⑴	〇カレンダーの作成 担当須田。	一月に開催。	会の開催を群馬県が当番県で十	○関東甲信越静地区岳連連絡協議	金会館にて行なう。	賞祝賀会を六月二十七日厚生年	○石井副会長の群馬県総合表彰受	地野、女屋		須田、松永、富山、笠原、	大橋、西山、加藤、長谷川、	水野、大沢、高田、松田、	大井、川辺、羽野、岡安、	出席 星野、石井、田中、樋口、		期日 昭和六十二年五月十三日水	;	理事会報告		文責 事務局長 女屋	収入額はいくらか。	○群馬の山の販売で予定している	に徴収したらどうか。	山協の負担金は岳連会費とは別
太丑、通口、大井、冈杼、	小林、石井、	場所 群馬県自治会館	期日 昭和六十二年六月十四日旬	*	画の説明。	いて、大橋良雄隊長から登山計	○ 境町山の会プモ・リ峰登山につ	松永)。	委員会を発足させたい。(石川、	ナ遠征について総会後に実行委	○海外登山部 本年のアンナブル	報告。(女屋)	県体協加盟競技団体理事長会議	向がある。	がきびしい。加盟団体の減少傾	○事務局 会計で非常に財政状況	辺)	いては高体連、太田に依頼。(川	っていただきたい、県央部につ	松井田が研究しているので加わ	頼してある。その他はミヤマ、	高会、奥利根は境町山の会に依	奥利根・上越の調査、上越は登	○群馬の山販売について 来年は	で行なう。(西山)		五月二十四日(日)に一般対象	ロックガーデンで救助訓練。	○遭対部、四月十七日(日)妙義	山岳スキー技術と雪上生活技術。	九月十二日(土)—十三日(日)	会。	八月二十六日(水)天気図講習	岩登り講習会。	六月十四日(日)榛名山黒岩、	術講習会。
七月五日(日)の谷川岳山碧き	全国遭対部会に出席。	西山部長が秋田で開催される、	参加者二十二名、一般者八名。	ロック・ガーデンで行なう。	一般対象の救助訓練を裏妙義の	○遭対部 五月二十四日 (日) に	烮	24.1	六月十四日 (日) 榛名山黒岩で	常任理事が出席。	協指導委員会総会があり、高田	○指導部 六月七日 (日) に日山	定する。(水野)	男女の選手、監督、コーチを決	六月十九日に国体委員会で成年	三位 割田好美 (吾妻)	二位 黒岩かおり (吾妻)	一位 篠原恵美 (吾妻)	少年女子	三位 荒木哲哉 (渋川工)	二位 秋山 剛 (渋川工)	一位 入沢健一郎 (渋川工)	少年男子	成績結果は次の通りでした。	山で少年男女の予選会を行った。	○国体部 六月七日 (日) に榛名	る。 (羽野)	は大沢常任理事にお願いしてあ	来上がりました。 次号の嶺呂	○編集部 本日嶺呂三十三号が出	部会報告	武井、土屋、小此木、鈴木	阿部、中島、高橋、阿部、	阿久沢、柴田、木村、田島、	黒崎、北村、堀江、女屋、	須田、松永、富山、笠原、
郭曽矵 (大井、富山)	売行き順調、上毛新聞で五〇〇	○「群馬の山」について	出席。	五月二十四日(日)田中理事長	〇日山協総会報告	ある。(村上)	なう。村でも引き受ける体制で	倉渕村の浅間隠山と角落山で行	○県民登山大会について	本年度は作成部数千部に決定。	○カレンダー作成について	にて開催(理事長・女屋)	月二十六日。日立市御岩山周辺	昭和六十二年七月二十四日—七	岳競技関東地区大会	第四十二回国民体育大会記念山	十五日、神奈川県丹沢山	昭和六十二年九月十三日-九月	第二十六回全日本登山大会	—九月十五日。	第二回昭和六十二年九月 十一日	月三十一日一八月三日。	岩登り、第一回昭和六十二年七	九日—七月二十三日。	山岳救助。昭和六十二年七月十	文部省登山研修会	せ。	○総務部 研修会、大会のお知ら	布。 (松永)	ることについて承認。規約の配	理事会にて実行委員会を組織す	〇海外登山部 五月十三日 (水)	日(日)に行なう予定(富山)	年の運動は八月一日(土)-二	瀬ゴミ持ち帰り運動を行なう例	○自然保護部 六月六日 (日) 尾
つ羊馬り山反管犬引に引たこつ・	(富山・笠原)	瀬ゴミ持ち帰り運動を行なった。	八月 日 (土) 一 日 (日) 尾	ったが、六十名の参加あり。	川岳山開きはあいにくの雨であ	○自然保護部 七月五日 (日)谷	け準備中。(阿久沢)		○海外登山部 アンナプルナ遠征	案を作成。(杉田)	田、日向野、清水、田島、で原	- は水野、高品	○指導部・スポーツ教室の開催。	(西山)	無届け登山が多くなっている。	七月七日救助。	ゼで土浦市の坂井敏修さん転落、	七月六日(月)一ノ倉沢2ルン	沢テールリッジで救助訓練。	○遭対部 七月五日 (日) 一ノ倉	野、松田)	で強化に現地へ行ってくる。(水	鈴木繁、斉藤健、原沢茂の三名	日-二十六日に茨城県で開催。	○国体部・関東大会が七月二十四	(羽野)	なった報告を提出してほしい。	旬に発行予定。各部で行事を行	〇編集部 領呂三十四号は八月下	部会報告	田中出,	富山、笠原、女屋、阿久沢	松田、長谷川、須田、松永	羽野、水野、竹山、大沢、	出席 田中、樋口、大井、川辺、	場所 群馬県体協会館

4月15日

山協の負担金は岳連会費とは別団体当りどのくらいか、また日

五月十七日 (日)谷川岳雪上技

須田、松永、富山、高田、松田、村上、

笠原、 長谷川

昭和六十二年七月八日小

(松永)

月 出常 星野、小林、田中、川辺、 〇海外登山部日 場所 群馬県体協会館 (田中) 其 町 和 オーニョン・ 野型四位 第	出し、十五日(日)会場は「去土)―十五日(日)会場は「去が七月十九日(日)に開催すが七月十九日(日)に開催すが七月十九日(日)に開催すが七月十九日(日)会場は「去土)―十五日(日)会場は「去	議会について。十一月十四日 開催された。 「関東甲信越地区山岳連盟連絡協 日茨城県で『 「一任。(女屋) ○国体部 七日 「一任。(女屋) ○国体部 七日 「一任。(女屋) ○国体部 七日 「一年。(女屋) ○国体部 七日 「一年。(女屋) ○国体部 七日 「一年。(女屋) ○国体部 七日	性理事、茂木稔(独峰会) に執り行われました。 たいる文部省登山研修所 でれる文部省登山研修所 でれる文部省登山研修所 でれる文部省登山研修所	0 0	第 ○日本登山医学研究会シンポジウ ○○部、価格は 第 ○日本登山医学研究会シンポジウ ○○部、価格は ○日本登山医学研究会シンポジウ ○○部、個格は ○日本登山医学研究会シンポジウ ○○部、個格は ○日本登山医学研究会シンポジウ ○○部、個格は ○日本登山医学研究会シンポジウ ○○部、個格は ○日本登山医学研究会シンポジウ ○○部、個格は ○日本登山医学研究会シンポジウ ○○部、個格は ○日本登山医学の ○○部、個格は ○日本登山医学の ○○部、日本の ○○部、日
八木原隊長よりア ○ 八木原隊長よりア ○ 八木原隊長よりア ○ 八木原隊長よりア ○	経走町立、&今町立 (踏査・縦走) (踏査・縦走) (踏査・縦走) (踏査・縦走)	群馬の成績は、成 を加入員は十八 四体関東地区大会が 野地区大会が 大会が 大会が 大会が 大会が 大会が 大会が 大会が	(確。(田中理事長) (分の二○○○部について 山」について 山」について 出 別野) 場 (別野) 場 は 大 場 は 大 場 は り 出 は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も は も も も は も も も も も も も も も も も も も	大会について O T T T T T T T T T	記布。(須田) ・ 発行部数一 ・ 発行部数一 ・ で、発行部数一 ・ で、そので、といるで、といるで、といるで、といるで、といるで、といるで、といるで、といる
	四しト 宗依	,	夢者・助手 水野、高田中、樋口、川辺、岡田中、樋口、川辺、岡田中、樋口、川辺、岡田中、樋口、川辺、岡田中、樋口、川辺、岡田・大沢、高田・大田・田中、樋口、川辺、岡田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・	<u> </u>	□ 2 1 1 2 2 3 4 1 2 2 4 1 2 2 4 1 2 2 4 1 2 2 4 1 2 2 4 1 2 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4 1 2 4
女屋、田中北 大沢、竹山、 不 大沢、竹山、 不 地山、 西山、 不 即 山、 不 即	田中、 一十月十二十月十二十月十二十月十二十月十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	群馬県山岳連盟編とする。(須田) 群馬県山岳連盟編とする。(須田) で開催、鈴木繁、	, - , - , - , - , - , - , - , - , - , -	に に に に に に に に に に に に に に	○遭対部 十月四日訓練を予定。 (須田) (須田) (須田) ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
イキをナチーナー 大橋病院の藤岡俊樹 八日に出発予定。 八日に出発予定。	〇自然保護部 日山協総会に富山 笠原、寺内の三名が参加。谷川 岳熊穴沢避難小屋付近を十月十 岳龍穴沢避難小屋付近を十月十 三日に調査した。十一月に榛名 山黒岩の清掃を行います。(笠 原、富山)	大会と合同で実施。(高田)大会と合同で実施。(高田)大会と合同で実施。(高田)	則基準が出来た。京都国体の下見に十月三十一日―十一月一日に行く。毎月第一水曜日に国体に行く。毎月第一水曜日に国体委員会を開いている。(水野)委員会を開いている。(水野)で第一回ジャパンカップに群馬で第一回ジャパンカップに群馬で第一回ジャパンカップに群馬をか合いを、ご替馬を係る)	日山協で山岳競技新規 たい。十一月発行予定 たい。十一月発行予定	の小林副会長あいさつ ○県民登山大会について 大会役員の決定、各コース責任 大会役員の決定、各コース責任 を発表。
0	○ 定年会十二月九日トップ食堂。 ○編集部 「	女屋、阿部、森田、寺内出席 田中、樋口、川辺、羽野、出席 田中、樋口、川辺、羽野、松田、長谷川、須田、笠原、松田、長谷川、須田、安原、松田、長谷川、須田、田中、樋口、川辺、羽野、	○境町山の会ブモ・リ峰登山隊 十月十二日に登頂成功、登頂者 は金子悦治と高田智博隊員及び シェルパー名で共同通信からた った今電話連絡がありました。 上毛スポーツ賞の推せんも同時 に承認される。) が 分 助 行	レーボール協会長太田武史氏御 ○総務部 十月五日女屋倉渕村に 行き打合せ。上毛新聞社から上 行き打合せ。上毛新聞社から上 一ザを登っている。(八木原) 一がを登っている。(八木原)
○境町山の会プモ・リ登頂祝賀会くりたい、総務部担当。	○上毛スポーツ賞に境町山の会プ ○上毛スポーツ賞に境町山の会プ 一月四日県体協各団体理事長会 一月四日県体協各団体理事長会 議女屋出席。 ○石井副会長十二脂腸潰瘍で入院 議女屋出席。	日水上町「去来荘」で開催。 ファルー 日本登山医学研究会シンポ六十三年六月十一日―十二ンポ六十三年六月十一日―十二	○海外登山部 十一月四日キャラ○海外登山部 十一月四日キャラバン開始。(田中) 「は完売、集金の協力をお願いしたい。(須田)したい。(須田)したい。(須田)したい。(須田)したい。(須田)したい。(、ン 太買レ国	○国体部 十月三十日—十一月一 ○遺対部 十二月七日冬山検討会、 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・